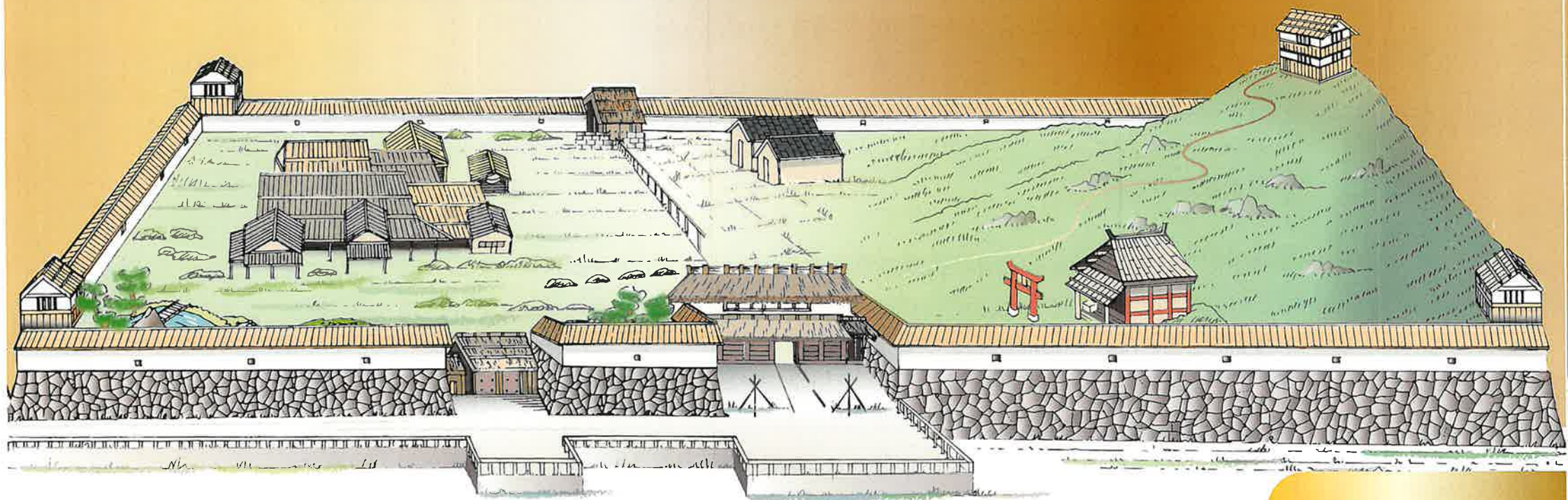
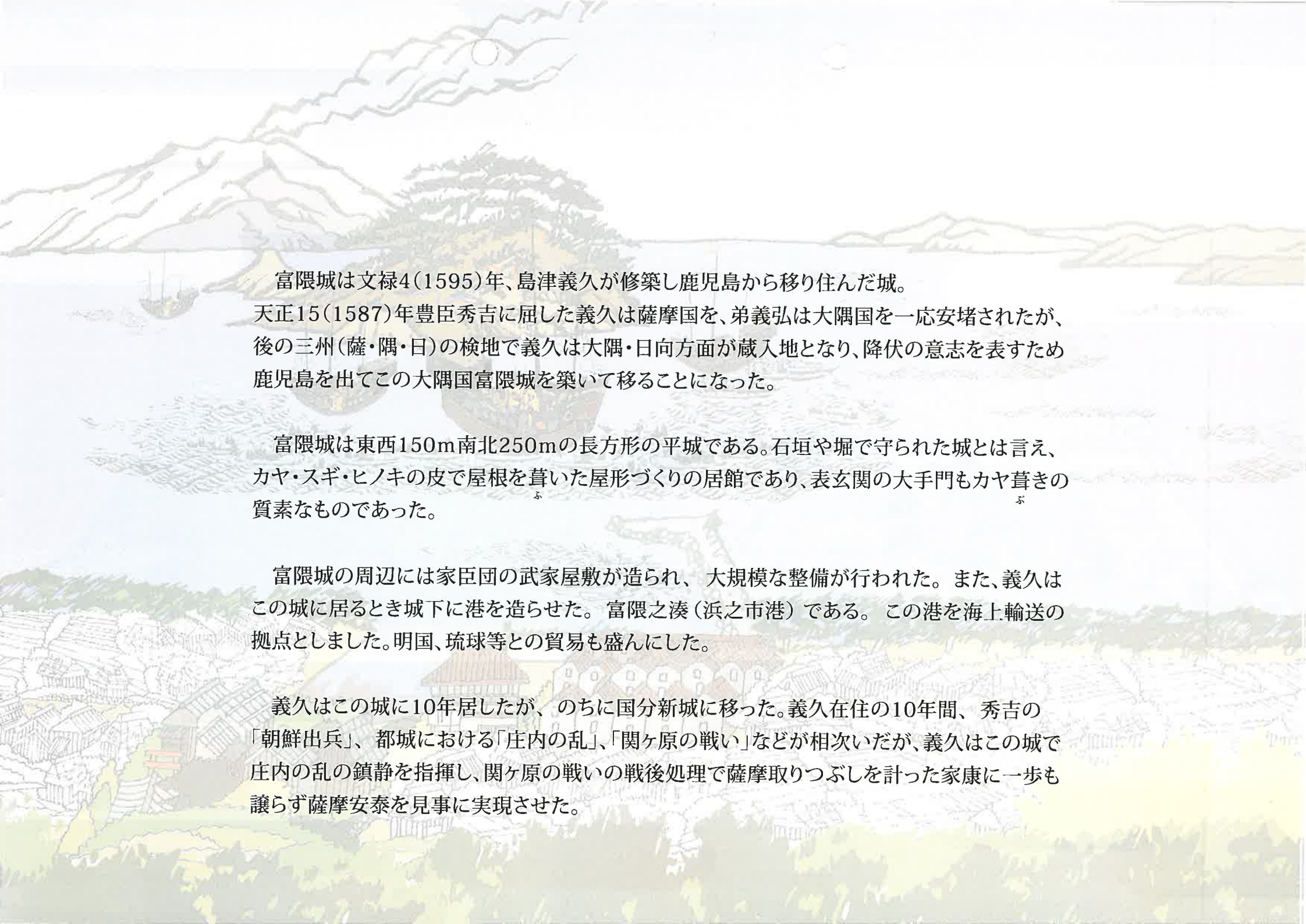


第16代 島津義久が住んだ

富隈城





富隈城は文禄4(1595)年、島津義久が修築し鹿児島から移り住んだ城。
天正15(1587)年豊臣秀吉に屈した義久は薩摩国を、弟義弘は大隅国を一応安堵されたが、後の三州(薩・隅・日)の検地で義久は大隅・日向方面が蔵入地となり、降伏の意志を表すため鹿児島を出てこの大隅国富隈城を築いて移ることになった。

富隈城は東西150m南北250mの長方形の平城である。石垣や堀で守られた城とは言え、カヤ・スギ・ヒノキの皮で屋根を葺いた屋形づくりの居館であり、表玄関の大手門もカヤ葺きの質素なものであった。

富隈城の周辺には家臣団の武家屋敷が造られ、大規模な整備が行われた。また、義久はこの城に居るとき城下に港を造らせた。富隈之湊(浜之市港)である。この港を海上輸送の拠点としました。明国、琉球等との貿易も盛んにした。

義久はこの城に10年居したが、のちに国分新城に移った。義久在住の10年間、秀吉の「朝鮮出兵」、都城における「庄内の乱」、「関ヶ原の戦い」などが相次いだが、義久はこの城で庄内の乱の鎮静を指揮し、関ヶ原の戦いの戦後処理で薩摩取りつぶしを計った家康に一步も譲らず薩摩安泰を見事に実現させた。